東方幻想記

モノノフ

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

神様の手違いで死んでしまった少年が幻想郷に行かされ渋々過ごす

目次

転成 ―― 1
執事になりました ―― 11
本当の能力とは ―― 19

転成

「ん？ここはどこだ？」
俺の名前は武田　信玄
名前からしておかしいがけっして俺は歴史の人物ではない
ただ両親が戦国オタでつけた名前だ
そのせいで俺は歴史の授業ででてくるたびにクラスの的にされる、最悪だ
ふわふわ
「あっれーなんだか地面が雲のようにふわふわしてるぞー」
まあ触ったことないから本当にふわふわしてるかわしらんけどな
ゼ「おっ、いたいた」
なんだこいつ、凄いTシャツ一枚にジーンズという夏場のおれの格好を連想させる同じ格好をしやがって
とりあえず誰かきいてみるか
「誰だお前は？」
ゼ「俺？俺は全知全能の神ゼウスだ！」

こいつ、中二病だな
世間に出て恥ずかしい仕打ちをする前におれが指摘してやるか
「おいお前、中二病は早めに治せよ」
ゼ「ちげーよ！」
いやTシャツにジーンズのゼウスが普通いるか？
怪しすぎるがとりあえずゼウスとしておこう
「まあ、お前が仮にゼウスとしよう、ならここはなんだ？天界か？」
ゼ「ああそうだ」
え、まじで？
「じゃあ俺死んだの？」
ゼ「ああ俺の手違いでな」
手違い？もしかして俺間違って殺されたの？
「おい、手違いってお前のミスで俺が死んだのか？」
ゼ「ああそうだ」キリッ
こいつ良い顔しやがる
「お巡りさんこいつです！殺人犯です！」
ゼ「まあまあ、落ち着け。代わりにお前を違う世界に復活さしてやるから」

「違う世界？ってことは俺はもう家に帰れねーの？」
ゼ「ま、そうなるな」
や、やべえええええ！俺のベッドの下に隠してあるお宝がみつかったら殺される！
「はははは、俺の人生終了のおしらせってもう死んでるか・・・」
ゼ「まあそう落ち込むなよ」
「てめえ、誰のせいだと思ってやがる！」
ゼ「あー、はいはいとりあえず俺も仕事が山積みだからさ、さっさと転成しようや」
こいつ、うぜえ
「・・・どんな世界なんだ？」
ゼ「幻想郷といってな、簡単に言うと男の楽園かもしれないな」
「え、まじで？」
ゼ「まじまじ」
「なら喜んでいくわ」
ゼ（こいつ、ちょろいな）
ゼ「そうだ、その幻想郷というところはなんと特殊な能力を持っている人たちがいるんだ」
「へー」

ゼ「だからお前にも能力を与えてやろう」
「へ？てことはゴム人間になって海が泳げなくなったりするってこと？」
ゼ「それ、ワン〇ースじゃねえか！そんな変な能力じゃなくてもっと良い能力をやるよ！」
「へえ、で、その能力とは？」
ゼ「『体力の限界を感じさせない程度の能力』だ」
「て、ことは感じさせないだけで実際には身体に負担がかかってるってことだよな」
ゼ「まあそうなるな」
「なんでこんな変な能力にしたんだよ！」
ゼ「すまんすまん」
「すまんで済んだら警察はいらんのじゃ！」
ゼ「あー、はいはい。じゃ、そろそろ飛ばすぞ」
「飛ばす？なにをだ？」
ゼ「お前の身体だ」
それが俺が最後に天界で聞いた言葉だった

「・・・　はっ！ここはどこだ！」
どうやら誰かの部屋っぽいな
ガチャ
え？なんか扉が開く音が聞こえたんだけどやばくね？ピンチじゃね？
咲「はぁ、今日も仕事が忙し・・・」
うわぁメイドさんだー、すっけえ初めて見たぜ。
まあメイドカフェならあったけど俺の財布事情的に行けなかったぜ
とゆうかや、やべえこれ完璧に俺不審者じゃん！
咲「貴方は誰ですか？」チャキ
ちょっ！このメイドさんナイフ構えてんだけど！
まあとりあえず誰か聞かれてるし答えておこう
「え、えーと、俺の名前は武田　信玄でーす。よろしく☆」
あ、なんで俺星マークつけたんだろ
咲「・・・」
メイドさんがナイフを放ってくる
このまま俺にクリティカルヒット！おめでとう！

じゃねえ！
あ、オワタ！
「へっくしゅん！」
オワタと思った瞬間くしゃみがでてきた
すると俺は身体が自然としゃがむ姿勢になりナイフを避けれた
「・・・　あれ？俺生きてる？」
咲「私のナイフを普通の人間が避けた⊠」
あ、メイドさんが焦っている。そうだ今のうちに俺は無害だとしょうめいしよう！
「あ、あのー」ツルッ
俺は説得しようと思いながら少しちかずこうとした足が滑ってしまいこける
そしてメイドさんの頭とゴツン！と鈍い音をたてながらぶつけた
「いってえ！」
咲（あ、なんだか意識が朦朧としてきたわ）
ドシン
「あれ？」
きっと俺の頭突きが痛すぎて倒れたんだろう
「すまなんだ！」

なんとなく俺は謝るがメイドさんからは返事がない、ただのメイドのようだ
「・・・　それにしてもはやくこの部屋からでなければ」
俺は部屋を後にする

なんだこの廊下
とてつもなく広いぞ！
しかも見渡すかぎり赤一色だし、超ホラーじゃん！
あ、そういえば最近やったシューティングゲームでこんな場所あったな
確かそのゲームのなかも赤一色だった気がする
・・・　このままぼーと考えてても無駄だしとりあえず出口をさがそう

あれから２０分位たっただろうか、一向に出口がみつからない
「はあ、もう俺はここで餓死するのかもしれない・・・」
と、おもった矢先。なにやら出口っぽい大きな扉があった

「お、もしかしてここか⊠とりあえず開けてみよう‼?」
　ギィー
　バタン
「あ、全然出口じゃねえ」
　レ「貴方、いったい誰かしら?」
　なんか幼女がいるし羽生えてるし可愛いしやばい
　ははは、もう俺はムキになるぜ
「俺は武田　信玄、阿保神のせいでこの世界に転成した!」
　レ「阿保神?そんな神様いたかしら?まあそれより貴方、いったいなんのようでこの紅魔館の主レミリア・スカーレットの部屋に来たのかしら?」
「いや、特に理由はないんだけど」
　本気で
　レ「そう、なら死になさい!」
　そう言うとレミリアは鋭い爪が生えた小さな腕で俺のボディーを殴って来た、見た目は痛くなさそうだが実はとても痛い。実際俺は今壁に叩きつけられている
「いっつ!肋骨何本か折れたなこれ」

まて、今さりげなくいった言葉。よーく考えながら見てみよう、どう考えても人間の言葉じゃないです

ゼ（おい信玄）
ゼウスか！何処にいるんだ？
ゼ（私は今脳内に直接話しかけているのでまだ天界にいる）
そうか、で、なんのようだ？
ゼ（今お前の能力が発動している）
ああ、あの体力の限界をなんちゃらかんちゃらのやつね
ゼ（そうだ、その能力のお陰で今、お前は気絶せずにすんでいる）
おお、結構この能力使えるな
ゼ（だろ、っとそろそろ時を動かすぞ）
え、これ時間止まってたの？
ゼ（ああ、おれの力でな）
・・・その能力が欲しかった
ゼ（だめだ、もう既に持っているやつがいる）
ちぇっ

ゼ（よし、時は動きだす）
レ「あら貴方、もしかして普通の人間じゃないわね」
まあ君は人間とは思えない容姿にパワーをもってるけどね！
「まあね」
レ「で、どうするの？このまま反撃しなければ死んじゃうわよ？」
「はは、生憎俺は幼女を殴る趣味はないかな」
レ「そう、ならば一方的に殺していいってことなのね」
「いや、駄目だけど！」

執事になりました

～紅魔館～

レ「くそっ！なんで当たらないのよ！」

レミリアは次々と弾幕をうってくるが俺はそれを無駄のない動きでよける

「へへん、ドッチボールは得意だったんだぜ、避けることだけな！」

なんで俺はこんな情けないことをいっているんだ？

レ「ねえそろそろ当たってくれない？」

「いやいやいや、これでうん、いいよ‼？ってゆうやつ普通いねえよ⊠」

いたら相当頭が逝っているやつか、我々の業界ではご褒美です！とかゆうやつだろえ？俺か？俺はノーマルだ、決してマゾではない

レ「うー…　もうやめ！めんどくさいわ！」

「おいおい、当たらないからってめんどくさいとゆうのを理由に諦めんのか？」

おい俺！煽るんじゃねえ！

まったく、勝ち目がないのになんで俺は調子にのったんだ？

レ「プッツン」

あ、なんか切れた音が聞こえてきたぞ？
これはもしかして激おこプンプン丸かな？
レ「…　グングニル！」
レミリアの手に禍々しい槍が現れる
あ、これはもしかしてその槍で殺されちゃうパターンかな？
あ、投げてきた。
「あー、来世には元の世界に戻れますように！」
グサッ
あれ？刺さってるっちゃ刺さってるけど刺さってる部分が肩だからまだ生きてるけどすっげえ痛え！
それに血が大量にでてるしもうこれは貧血で死ぬな
「ああ、やっぱり来世には元の世界に戻れますように…　ガクッ」
レ「あ、いけない私ったら瀕死にまで追い詰めてしまったわ！折角いい執事になりそうな逸材だったから生かそうと思ったのに！とりあえず…　咲夜ーーー！」
咲「はい、なんでしょうか？」
レ「この人間を空き部屋まで運んで」
咲「はいわかりまし…　た⊠」

レ「どうしたの咲夜？」
咲「いえ！なんでもございません！」
レ「そう？ならいいけど」
咲（この人間・・ 確かに私を倒したやつね、まあそれは後にしといてとりあえず運びましょう）
咲「よっこいしょっと、それでは失礼します」

ぜ（お・・・ い・・・ おい・・・ おい信玄！）
・・・ん・・・ あと五分・・・
ぜ（俺はお母さんじゃないぞ？さっさと起きろ！）
・・・ ふぁーあ、よく寝たぜ
ぜ（まったく、心配させやがって）
男に心配されても一ミリたりとも嬉しくねーよ

ゼ（俺も本当はしたくねーよ）
で、今回の用件は？
ゼ（ああ、そのことだがどうやらお前はここで執事をやらされそうだぞ）
はい？
ゼ（だから執事をやらされそうだぞって）
俺が？
ゼ（ああ）
て、ことは、あの館の主とか言っていたレミリアの執事をするってことだよな？
ゼ（そうなるな）
・・・もうどうにでもなれ！
ガチャ
ゼ（お、あのメイド長の咲夜とゆうやつが来たからもう黙るぞ）
ああ、また後で

咲「・・・あの、さっき誰か貴方以外の声が聞こえたのですけど誰か他にいますか？」
他の誰か？
おい、それってゼウスの声じゃないか？

だとしたらもしかして咲夜？だったっけ、この子もなにか特殊な人なのかな、まあまた後でゼウスに聞いておこう
それととりあえずは誤魔化しておくか
「いや、俺以外だれもいねえよ」
咲「・・・ そうですか、それより貴方、先程お会いしましたか？」
「ん？さっきか・・・・・・ ！」
そうだ俺は確か咲夜を気絶させてしまっていた！
だとしたら怒っているに違いない！
・・ とりあえず謝ろう
「す、すみませんでした！」
咲「・・・ はあ、もういいです、油断した私が悪かったんですし」
呆れられた
咲「その前に、怪我、痛くないんですか？」
怪我？っ！ちょっ、身体中包帯だらけ！
あ、だんだん痛くなってきた
そして痛みが完全に身体に行き渡る
「いってえ！やばい！特に肩！」

咲「まあ骨も何本も折れてますし肩はお嬢様のグングニルか貫通して血がたくさんでてましたし、当然の痛みでしょう」
ですよねー

「ふう、やっと痛みが引いてきたぜ」
レ「そう、それは良かったわね」
「お、お前はさっきの！」
レ「あら、憶えてくれてたのね。嬉しいわ」
「じゃなくてお前！良くも普通の人間に槍投げしてくれたな‼？」
レ「普通の人間？私には異常な人間にしか見れないのだけれど」
「・・・」
否定できないのが悔しいがどうしようもできない！
咲「それで、お嬢様。わざわざなぜこちらへ？」
レ「こいつに話すことがあるからよ」

そういいながらか俺を指差す
あ、わかった。このまま俺は執事をさせられるんだな
レ「ねえ、貴方。私の執事にならない？」
ほーら当たったぜ！
とゆうか執事か…
「拒否権は？」
レ「ないわ」
「… じゃあやらせていただきますわ」
レ「よろしい、咲夜！確か倉庫に執事服が入ってたと思うからもってきて！」
咲「はい、少々お待ちを」
そういった瞬間咲夜の手には執事服があった
レ「相変わらず便利な能力ね」
咲「ありがとうございます」
レ「さ、早速私達がでていくから1分以内に着替えてね」
「1分以内⊠無理無理！」
レ「はい、スタート！」

「ハアハアなんとか着替えれたぞ」
レ「うーん、残念1分0．2秒でした！」
細けえ！
お前は50m走でも測ってるきなのか？
咲「ここの執事長になるからにはこれくらい1秒でできないとだめよ」
はい？今1秒と申しましたか？
レ「咲夜、真に受けてるから冗談はやめてあげなさい」
咲「す、すみません」
咲夜とレミリアはクスクスと笑う
「さて、これからどうしたらいいんだ？」
レ「そうねえ、早速この紅魔館の掃除でもしてもらうわ。咲夜、指導よろしくね」
咲「はい、承知しました」
どうやら俺の生活に平穏な日々が続くことはなさそうだ

本当の能力とは

トコトコトコ

今俺はこの館の案内を咲夜にしてもらっている

咲「ここが図書館よ、ここはパチュリー様と小悪魔がいるから挨拶していきましょう」

「はーい」

え、今小悪魔って言った？

小悪魔って普通に悪魔だよね？

おれ人間だし生贄されないだろうか・・・・

「なあ咲夜」

咲「なに、信玄」

「俺って生贄されるかな？」

ふふっと咲夜が笑いながら言う

咲「馬鹿ねえ、そんなことするような悪魔だったらここに住まわせたりしないわよ」

「で、ですよねー」

いやいやわかってたよ☒

ただちょーと笑わそうとしただけで決してびびっなんかいないよ！
咲「さ、はいるわよ」
「…」
ガチャ
扉を開けるとそこは本のパラダイスだった
なんだこの本の多さは！
しかも殆ど英語や変な言語で書いてるし、表紙には魔法陣が書いてあるしヤバイ系のやつじゃね⊠
小「あ、咲夜さん！今日はなんの用で？」
咲「今日はこの謎の人間、武田　信玄が執事になったから知らせに来たのと紅魔館の案内できたのよ」
おい…　謎の人間って誰だよ…
パ「武田　信玄⊠」
急にパジャマ姿の子がこっちをむく
パ「武田　信玄ってあの戦国時代の武将よね⊠」
咲「残念ですがその武田　信玄ではありません」
パ「…　なら興味は無いわ」

「ひ、ひでえ」
小「信玄さん、信玄さん！」
「あ、はい？」
小「私は小悪魔といいます！よろしくお願いしますね！それとあのパジャマ姿の人はパチュリー様です！」
「あ、ああよろしくね」
凄い元気な子だね
確か俺の兄さんもあんなテンションだったっけ？
ふっ、懐かしいな
咲「さて、信玄。そろそろ次いくわよ」
「はーい、それじゃばいばい小悪魔さんとパチュリー様～」
小「はいまた会いましょう！」
パ「…」
パチュリーは最後まで無言だった

咲「さて、これで最後だけれどここが一番危険な場所よ」

「へー、地下ってことは牢屋？」
　咲「いえ、普通の部屋よ」
「なら危険じゃなくない？」
　咲「危険なのはその中にいる人物よ」
「ふーん、今度入ってみよっかな」
　咲「駄目よ！私でも許可無しじゃはいれないのよ」
　咲夜が焦っている
　きっと俺が思っているより危険なんだろう
「なるべく避けておこう」
　フ「なにを？」
　へ？誰このこ、全然知らない人なんだけど
　咲「信玄！離れてて！」
　フ「あー、うるさいなあ咲夜は、ちょっと黙ってて」
　フランは咲夜の首筋をトンっとし気絶させる
　あのー、あれだ、よく漫画とかであるやつ
　え？最近のはない？
　じゃあ昔の漫画を読んでみましょう

フ「さて、貴方は確か信玄？だったっけ。私はフラン！よろしくね！」
「あ、ああよろしく」
フランが握手を求めてきたので手を差し出す
すると
ギュッと握られて一本背負いをされる
そして俺は床に凄い速度で叩きつけられる
ボキボキッ！
「ぐはぁ！」
や、やべえ。骨どころじゃなくて内臓も破裂してるわ
あれ？よく考えてみよう
俺の能力は感じさせないだけで負担はかかる筈だ
てことは普通だったらもう気絶しているはずたろ？
ゼ（おい信玄！）
なんだこの忙しいときに
ゼ（お前の能力の説明を間違えていた！お前の正しい能力は『体力の限界を操る程度の能力』だ！）
え？てことは俺は今無意識のうちに体力を大幅増量してるってこと？

ゼ（ああ、そうなるな）
おいおいそういうのは最初っからきずけよ
ゼ（まあまあ、結果オーライなんだし気にするな）

フ「やっぱり生きてるわ！」
「え？俺は今の技で死ぬか生きるか試されてたの？」
もうちょっとで死ぬところだったんだぞ
ふざけるな！
フ「そんなことより次いっくよー！レーヴァティン！」
フランの手に真っ赤な剣が握られる
フ「そーれっ！」ブンッ
フランの剣が俺に降りかかる
だが俺は体力（スピード）の限界を上げ避ける
フ「ふふふ、やっぱり貴方、面白いわね！」ブンッブンッ
先程とは比べものにならないくらい早く俺に剣を振る
だが次はおれの体力（動体視力）を上げ全ての動きを一瞬にして分析し避ける
「これならいける！」

フ「あっれー？もう調子のっちゃった？じゃーあーフラン、ちょーとだけ本気だしちゃうね！」
フランが四人になる
そしてレーヴァティンも四つになる
フ「これでもう避けられないね！」
俺はいつの間にかフランに囲まれた
「…　ふふふ、ならば俺は体力（跳躍力）を上げさしてもらおうじゃないか！」
ブンッ
フランが剣を振った瞬間におれはジャンプし避ける
フ「ちっ、すばしっこいわね！」
フランは俺が着地する前に俺のもとに飛んでくる
「お前もな！」
俺は体力（重量）をあげようとする
「…　あれ？」
あ、体の力に重量関係ねえ
フ「これで終わりね！」
俺も終わりだと思った、その瞬間俺は何故か地面に足をつけていた

咲「ふう、間に合ったわね」
フ「もう！なんで邪魔するの⊠キュッとしてドカーン！」
天井が崩れ落ちてくる
だが俺の方に落ちてくるのではなく咲夜の方に落ちていた
「咲夜、危ない！」
俺は直ぐに咲夜のほうに走りなんとかしてお姫様抱っこをし避けれた
「ハアハア、あっぶねえ」
咲「ちょっと信玄⊠」
「あ、すまねえ」
俺は咲夜を降ろす
咲夜の顔をちらっとみたが何故か顔が真っ赤になっていた
フ「あー、もうなんでなんでよけるの⊠」
「危ないからだろ！」
さて、そろそろ決着をつけるか
俺は全速力で走りながら体力（腕力）をあげ
フランの元へ駆け寄った
「これでお終いだ」

俺はフランの腕を掴みおもいっきり廊下の端まで投げ飛ばした

ドゴーン！

フランは壁に衝突し壁は蜘蛛の巣状に割れていた

「ハアハア、よし勝てた・・・ぞ・・・」バタン

俺は能力の使い過ぎで倒れてしまった